写真文化首都 北海道
「写真の町」東川町

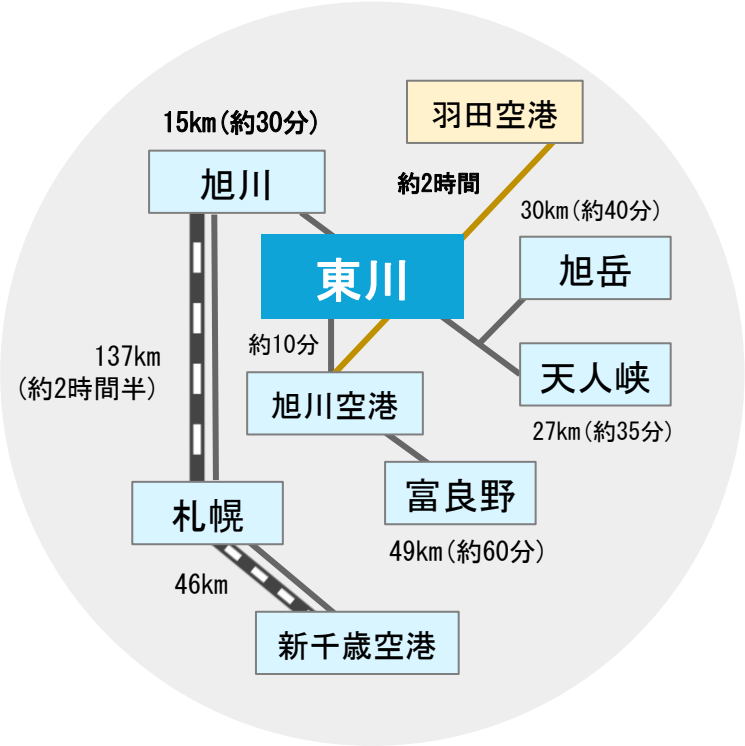
多文化・多世代共生のまちづくり「東川版生涯活躍のまち」

町の概要

■立地・アクセス

東川町は、**北海道のほぼ中央に位置する、人口約8500人の町です**。東部は山岳地帯で大規模な森林地域を形成し、**日本最大の自然公園「大雪山国立公園」**の区域の一部になっています。**大雪山系の最高峰旭岳（2,291m）**は、東川町域に所在。豊富な森林資源と優れた自然の景観が観光資源として高く評価されています。

▼都市部からのアクセスの良さが魅力
羽田空港から町まで：約2時間
旭川空港から町まで：約10分
旭川駅から町まで　：約30分



2024年6月30日現在
人口：8,509人（うち外国人474人）
面積：247.30㎢

町の概要 ｜ 中心街の景観

町の概要 ｜ 米のまち・田園風景

町の概要 ｜ 大雪山国立公園：旭岳・天人峡

上水道がなく、「天然水」を生活水として暮らしているまち、東川町。

東川町は、全国的にも珍しい、北海道でも唯一の上水道の無い町です。その秘密は、大雪山の大自然が蓄えた雪解け水が、長い年月をかけてゆっくりと地中深くにしみ込み、ゆっくりと東川町へ大切に運ばれてくるからなのです。

東川町で暮らす人たちは、この水を生活水として利用しており、天然の美味しい水で育ったお米や野菜は格別です。また、豆腐や味噌など東川町の地下水を惜しみなく使い、本物の味を追求した加工品や、飲食店でも水の恩恵を受けています。

大雪旭岳源水は、大雪山の自然が創りあげた銘水として知られ、良質で美味しい地下水に恵まれた中でも最上級の水です。ミネラルが豊富にバランスよく含まれ、水温も約６～７度と通年を通して一定で、日々こんこんと湧き出ています。（湧出量１分間に約4,600L）

【大雪旭岳源水】
・環境省選定「平成の名水百選」（平成20年６月）
・特許庁「地域団体商標登録」（平成25年４月）
・モンドセレクション・ワールドセレクション最高金賞受賞

まいにち天然水

「写真の町」を軸に進める東川町のまちづくり

東川町は1985 年に「写真の町」を宣言して以来、自然と文化と人が出会う″写真映りのよい″まちづくりを進めてきました。わたしたちはこれからも、世界中の人々に開かれ、世界中の人々が触れ合え、世界中の人々の笑顔が溢れる、「写真文化を核にしたまちづくり」に取り組みます。

右は、東川町のまちづくりを表した図。「写真の町」を中心に、人と文化、自然を大切にしながら、さまざまな取り組みを行い、町民と東川ファンを巻き込んでまちづくりを進めています。

「写真の町」のまちづくり
https://higashikawa-town.jp/portal/photo/panel/17

写真文化首都「写真の町」

1985年からはじまった「写真の町」
40年続く文化でのまちづくり

■写真の町の出発点

東川町の「写真の町」の歴史は、1985年までさかのぼります。東川町が21世紀に向けて「町民が参加し後世に残し得る町づくり」を模索したなかで、「写真」でのまちづくりをスタートさせました。東川町では、

「写真の町宣言」（1985年6月1日・写真の日）
「写真文化首都宣言」（2014年3月）

という、２つの写真にまつわる宣言をしています。

◆写真の町の目的：
「自然」や「文化」そして「人と人の出会い」を大切にすること。
①写真映りの良い町づくり
②写真映りの良い人づくり
③写真映りの良い物づくり

＜写真の町宣言＞

「自然」と「人」、「人」と「文化」、「人」と「人」それぞれの出会いの中に感動が生まれます。
そのとき、それぞれの迫間に風のようにカメラがあるなら、人は、その出会いを永遠に手中にし、幾多の人々に感動を与え、分かちあうことができるのです。
そして、「出会い」と「写真」が結実するとき、人間を謳い、自然を讃える感動の物語がはじまり、誰もが、言葉を超越した詩人やコミュニケーションの名手に生まれかわるのです。
東川町に住むわたくしたちは、その素晴らしい感動をかたちづくるために四季折々に別世界を創造し植物や動物たちが息づく、雄大な自然環境と、風光明媚な景観を未来永劫に保ち、先人たちから受け継ぎ、共に培った、美しい風土と、豊かな心をさらに育み、この恵まれた大地に、世界の人々に開かれた町、心のこもった"写真映りのよい"町の創造をめざします。
そして、今、ここに、世界に向け、東川町「写真の町」誕生を宣言します。

写真甲子園
National High School Photography Championships

町の特色・特徴的な取り組みとそのキーワード

写真文化首都「写真の町」

・1985年「写真の町」宣言
・2014年「写真文化首都」宣言
・東川町国際写真フェスティバル
・写真甲子園

etc…

水が豊かな町

・大雪山が生み出す豊かな水資源
・全戸が地下水で生活
・上水道がないまち

etc…

大雪山・旭岳の町

・北海道最高峰「旭岳」
・2291m
・大雪山国立公園の一部を有する

etc…

お米の町

・高品質ブランド米「東川米」
・単一農協、JAひがしかわ
・ゆめぴりかコンテスト最高金賞
・2020年 公設民営酒造誕生

etc…

木工家具の町

・「旭川家具」の3割の産地
・2021年「椅子の日」制定
・建築家・隈研吾さんとの連携
・君の椅子プロジェクト

etc…

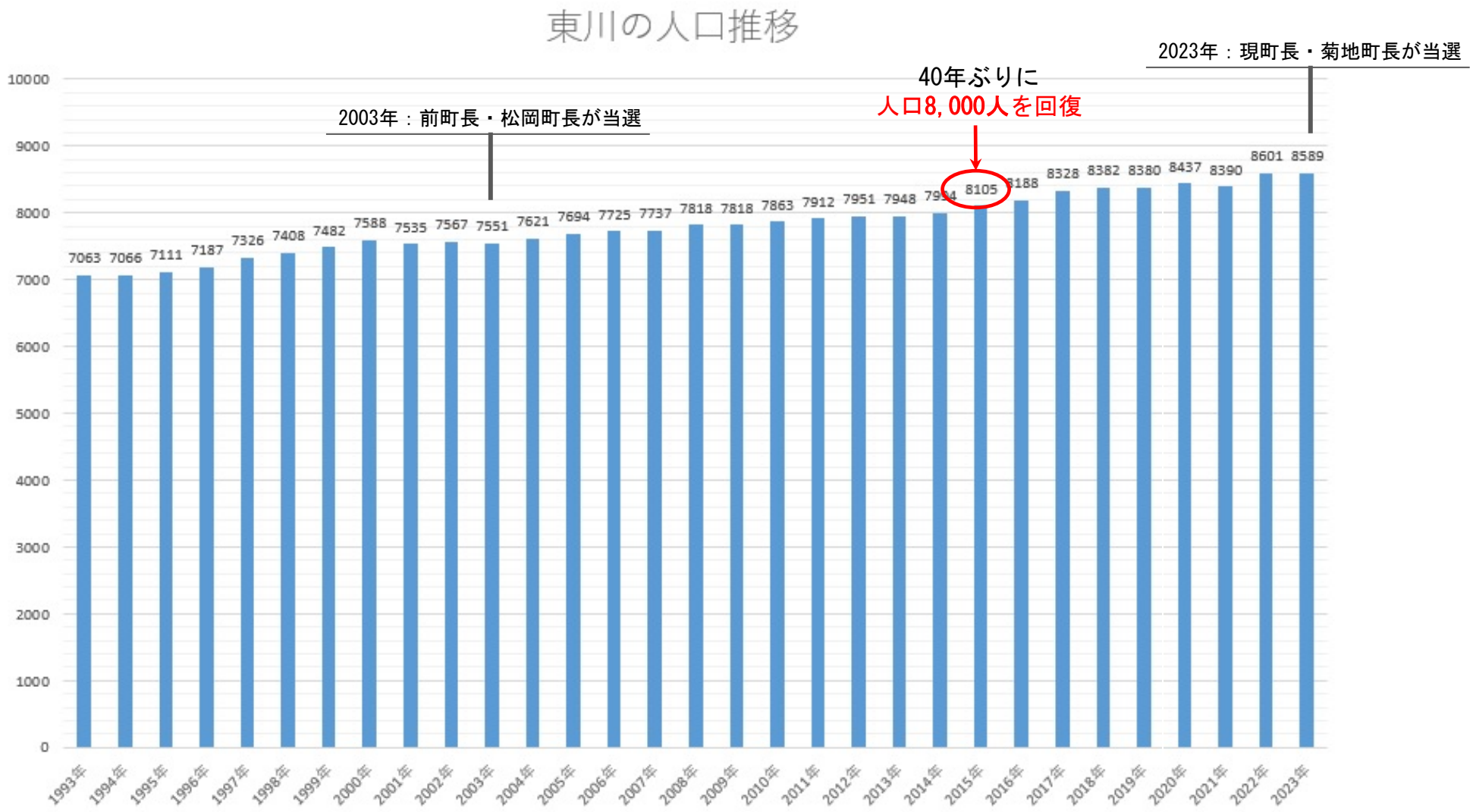
適疎な町

・25年間人口が増え続ける町
・「適当に疎がある」状態
・2022年「ゼロカーボンに取り組む 適疎な町」宣言

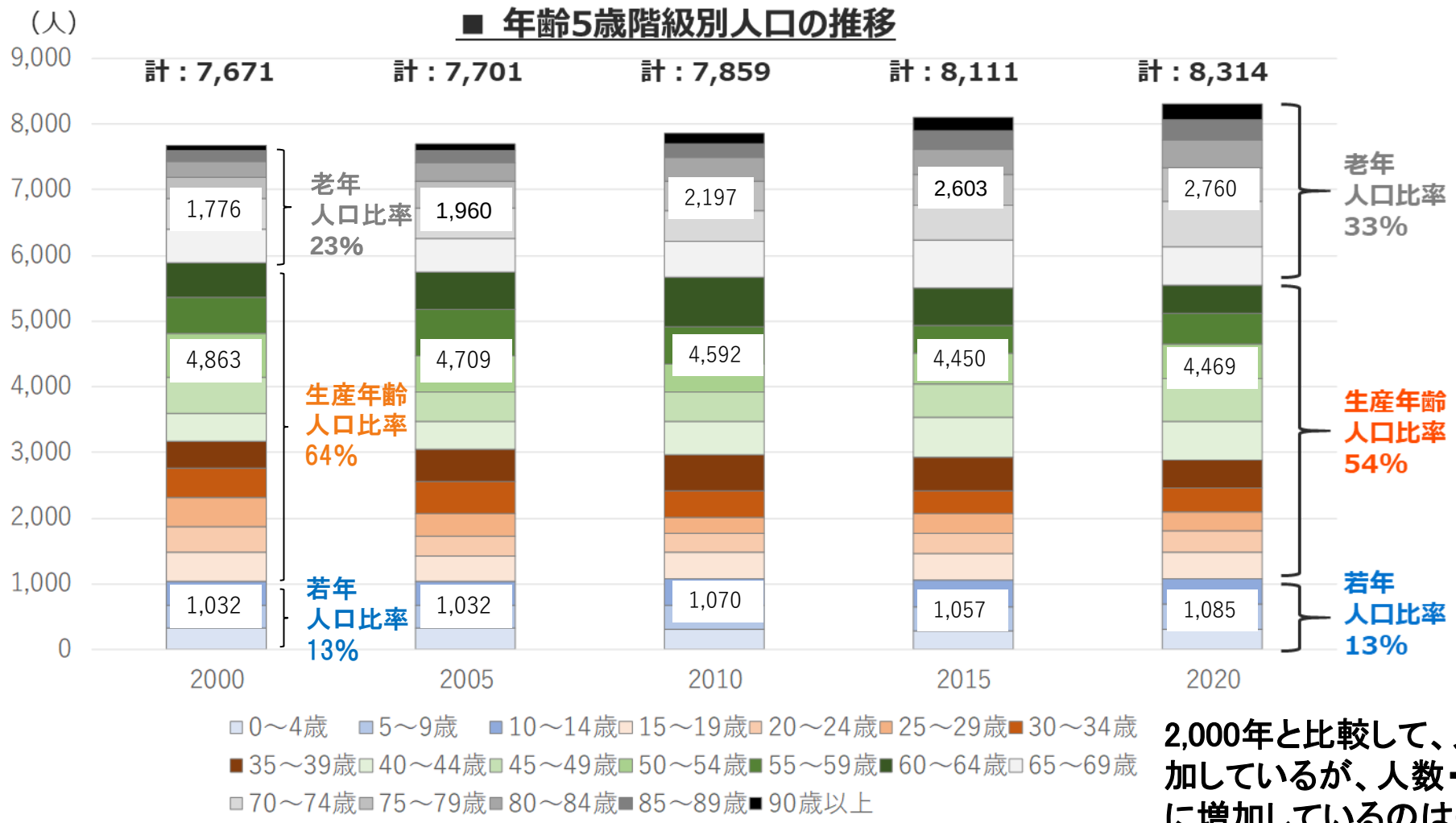
etc…

30年間で人口が約2割増加 ｜ 定住人口の推移

30年にわたって、ゆるやかに人口が増加



年齢5歳階級別人口の推移



2,000年と比較して、人口は増加しているが、人数・比率ともに増加しているのは65歳以上で、生産年齢人口は減少

多文化・多世代共生のまちづくり「東川版生涯活躍のまち」

「生涯活躍のまち」の導入のプロセスについて

「生涯活躍のまち」導入の経緯

＜当時の町の課題＞
　東川町には、毎年一定数移住等による転入があり人口は増加傾向であったものの、特に15歳から30歳までの若年層の人口規模が少なく、将来的な出生数の減少に伴う町の基幹産業の衰退、若者の町外流出等が危惧されていた。

＜導入の経緯＞
　そのような課題がある中、移住等により 新しい住民や外国人が増えている状況を地域の強みと捉え、「生涯活躍のまち」づくりにより、「誰もが居場所と役割を持ち活躍できる東川町」という将来像を地域住民全員で共有し、その実現のため、多文化多世代の交流や就業支援等を通じ地域の一体感や魅力を向上させ、移住促進・関係人口づくりが期待できると判断したため、「生涯活躍のまち」を導入した。

「生涯活躍のまち」導入のプロセス

＜導入のプロセス＞
① 地域課題やニーズ等の把握、地域の強みや地域資源の整理
② 生涯活躍のまち事業の具体的な施策の検討・立案
③ 生涯活躍の町事業を実施する庁内横断的な組織設置、施策内容・事業実施体制等検討
④ 生涯活躍のまちの基本構想となる地域再生計画、地方創生推進交付金実施計画の策定
⑤ 議会、地域住民への生涯活躍のまち事業説明
⑥ 地域再生計画・交付金実施計画採択後、生涯活躍のまち事業実施

＜苦労した点＞
・生涯活躍のまちを推進するための財源の確保

多文化・多世代共生のまちづくり「東川版生涯活躍のまち」

転入者や外国人を含めた本町の住民の力を引き出し、活躍してもらえる仕組みづくり、多文化・多世代の共生により、自立的で持続可能な“東川版生涯活躍のまち”を実現していく

“東川版生涯活躍のまち”

❶新しい働き方やしごとをつくる

日常生活の中のあいた時間を活用し、好きな時間にやりたい仕事ができるしくみ**「しごとコンビニ」**など、新しい働き方や（経済基盤）をつくります。

・しごとコンビニ（短時間ワークシェアリング）
・小商いで稼ぐ仕組みづくり（コミュニティカフェ・農園等）

❷学びや活動の機会を増やす

大雪山文化や写真文化など、東川町がもつさまざまな地域資源を活かした「学び」や活動を提供するとともに、スポーツやボランティア活動などを含めた「活躍の機会」を増やします。

・できるナビ（町民の、「できる」こととを見つけ、それを「育て・応援していく」仕組みの構築）
・地域資源を活かした学びや活動の機会の創出

❸みんなが暮らしやすい住まいをつくる

空き家を掘り起こし、東川町に移住する人々の住まいとして活用します。また、誰もが、いつまでも安心して暮らせる住まいや、地域のあり方を研究し、その整備につなげます。

・高齢者の便利な街中への住み替え住宅・エリアの検討
・空き家バンクの開設、住宅活用の意識啓発

❹いつまでも安心して暮らせるしくみを整える

地域包括ケアや医療の充実・強化、幅広い介護人材の育成など、年をとってもいきいきと暮らしていくことができるしくみや、体制を整備します。

・地域包括ケアシステム・健康プログラムの充実・強化
・外国人の介護福祉人材育成体制の構築
・子育て・保育環境の整備

❺まちや暮らしの魅力を発信する

「誰もが居場所と役割を持ち、活躍できるまち」の魅力を町外に向けて発信し、移住の促進など、新しい人の流れをつくり出します。

・お試し移住等暮らし体験・イベント事業の実施
・移住関連情報提供システム構築
・まちの資源である、文化や芸術関連の事業や取組

❻すべての人が共生できて移動しやすいしくみを整える

誰にとっても利便性の高い公共交通のあり方を検討し、しくみを整えます。また、日本語学校などを活用した、多文化共生の基盤づくりに取り組みます。

・地域共助交通「地域コミュニティカー」、乗り合いタクシーの利便性の向上、自動運転の実証
・留学生地域交流プログラム等の実施
・外国人材の活躍の場の創出

事業の一部についてご紹介

多文化・多世代共生のまちづくり

多様な国際交流事業

写真を通じた交流	日本語教育事業	JET プログラム活用	姉妹都市交流	外国人介護人材育成事業
写真文化首都として、世界中の高校生が集う、「高校生国際交流写真フェスティバル」など写真を通じた交流の推進。(2019年度は22の国・地域が参加)	全国初、現在も唯一となる公立日本語学校のほか、民間専門学校による日本語学科により300名程度の留学生が滞在。	JETプログラムによる外国人青年を招致。 ・外国語指導助手(ALT)5名 ・ｽﾎﾟｰﾂ国際交流員(SEA) 3名 ・国際交流員(CIR)10名	海外4都市との交流 【姉妹都市】 カナダ:キャンモア町 ラトビア:ルーイエナ ロシア:アニワ市 【文化交流協定】 韓国:ヨンウォル郡	他地域と連携し、留学生を招致し、東川町内の専門学校にて、全国的に不足する介護福祉士を養成。

東川から発信する「ヒト・モノ・コト」の相互連鎖から拡がるまちづくり

様々な取り組みにより生まれる多様な交流により地方創生の好循環が発現しているほか、文化や言語を超えた相互理解を促し、多文化共生社会の形成につながっています。

- 交流人口・関係人口の増加
- 知名度の向上
- 地域内消費の拡大
- 人材の育成・供給

国際交流による地域課題の解決＝新しい国際交流のカタチ

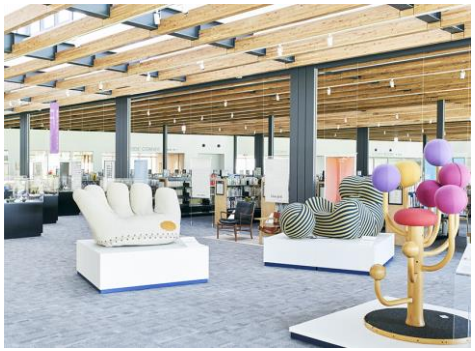
国内初、現在も唯一の「公立」の日本語学校　東川町立東川日本語学校

2015年に創立した東川町立東川日本語学校は、アジアを中心に**世界中から日本語を学ぶ留学生を積極的に受け入れ**ています。語学だけでなく、文化体験や地域の体験学習なども実施し、**地域の人々や日本の文化に触れる機会を多く生み出しています。**
また、日本語学校内に留学生・町内で働く外国人等の相談窓口、留学生の就職支援、日本語の会話練習・日本文化・アウトドア体験等のイベントを企画運営する多文化共生室を設置し、**国内外を問わず東川町に居住・滞在する全ての人が交流し、活躍する生涯活躍のまちづくり**をしています。
このほかに、町内には民間専門学校が日本語学科を設置しているほか、町と専門学校、近隣市町村が連携し、**地方で深刻な問題となっている介護人材不足の解決に寄与する外国人介護福祉人材を養成**する取り組みも進めています。

多文化・多世代共生のまちづくり

複合交流施設 せんとぴゅあII　多様な文化の発信と人々の交流を創出

東川町が有する「**写真文化**」、「**家具デザイン文化**」、「**大雪山文化**」を**通じた文化活動を中心**に、図書機能、国際交流や日本語学校、住民の自主的な活動など、**国内外、そして地域内外を問わず多様な人々と文化が交流する写真文化首都の拠点**となる施設です。
東川町にゆかりのある木彫刻や、木工クラフト、絵画などの芸術作品をはじめ、デザインや機能性にすぐれた「旭川家具」をふんだんに取り入れ、図書機能や町民の様々な活動を支えたような交流を生み出すコミュニティースペースなど、全く新しい体験や交流の場を創り出しています。
せんとぴゅあには、まちの宝物がたくさん詰まっていて、それをみんなが好きに見たり体験したり、集まった人々で交流したりできる「まちの宝物ひろば」になっています。



全世代共生型“交流×活躍×健康”プラザ

全世代共生型“交流×活躍×健康”
「東川町共生プラザ　そらいろ」

多くのひとが集い、誰もが居場所と役割を持ち、いきいきと暮らす空間**「東川町共生プラザそらいろ」が、2023年10月２日にグランドオープン**しました。
健康づくり、介護予防、子どもの遊び場、ラウンジ、キッチン、ワークスペース等の機能を有し、**「全世代」「交流・居場所」「活躍・しごと」「健康」**というコンセプトがちりばめられた施設であり、オープンで、行われている活動の様子が伝わることで、それらに対する興味を喚起し、参加しやすい、全世代共生型の交流×活躍×健康の相乗効果でウェルビーイングを高める施設です。
それぞれのライフスタイルを尊重しつつ、若い世代が安心して暮らし、希望する人が子を産み育てていける環境を整え、高齢者がいつまでも地域の一員としていきいきと暮らせる生涯活躍のまちづくりを推進する拠点です。

そらいろ
東川町共生プラザそらいろ

「空の色は見る人によってさまざま。この施設も使う人によって役割や機能は様々であってほしい。沢山の可能性が空一面に広がるような場所であってほしい」

全世代共生型“交流×活躍×健康”プラザ

活動風景

全世代交流事業

そらいろきっず（職業体験）

社会福祉協議会事業

そらいろきっちん

普段のようす

子ども第三の居場所事業

全世代共生型“交流×活躍×健康”プラザ

「コンディショニング」を日常にする新しい拠点

オリンピック選手のトレーニング等もサポートするなど専門性が高く、かつ、従来運動等をしてこなかったような幅広い層をも対象とした手法を展開している**「株式会社R-body」**よりコンディショニングコーチ2名が着任。**施設を訪れる町内外の人々にカラダの調子と整える「コンディショニング」セミナーを開催**している。また、部活動や少年団活動、介護予防教室、シニアクラブ、町内企業にも出前講座を行い、**全ての人がいつまでも健康で、地域の一員として活躍し、希望する暮らし方ができる健康なまちを推進**。R-body ACADEMYのカリキュラムを導入し、介護人材のスキルアップ及び介護トレーナ育成、更に町民の健康意識を高める為に、カラダに関する知識と運動を身につけるための新たな学びの場として一般向けのアカデミーであるコンディショニング教室を実施した。

毎月約50回開催されているコンディショニング講座

親子での朝活コンディショニング

多文化・多世代共生のまちづくり「東川版生涯活躍のまち」

「生涯活躍のまち」事業の実施体制

地域再生推進法人

町が指定した地域再生推進法人である（株）東川振興公社を「生涯活躍のまち」の事業運営主体とすることにより、民間事業者の持つ専門性や知見等を活用した分野横断的な事業の構築及び収益性の確保を図った。また町では、地域再生推進法人への職員派遣や兼業許可により町職員が「生涯活躍のまち」事業へ参画することを促進しており、民間事業者と町が連携し、一体となった事業運営ができるよう工夫して取り組んでいる。

※地域再生推進法人とは、地域再生法に基づき、地方公共団体を補完し、より地域住民に近い立場から、コーディネーター又はプレーヤーとして地域再生に取り組むNPO、一般社団法人、一般財団法人又は会社等

＜指定までのプロセス＞
①町内公共施設の管理運営やふるさと納税返礼品関連業務等を担っていた第三セクターの㈱東川振興公社に地方創生関連事業・地域再生推進法人制度の説明、地方創生関連業務の受託の可否・町との連携体制等の検討
②東川振興公社内に地方創生部門を立ち上げ、町へ地域再生推進法人指定の申請
③町による申請内容の審査
④指定の決定、指定の告示

＜地域再生推進法人のメリット＞
・民間事業者の持つ専門性や知見、町内外の幅広いネットワーク等を活用し、町と連携しながら迅速かつ柔軟に地方創生の取り組みを実施できる。
・地方創生関連事業について、地域再生推進法人として指定されていることにより、随意契約による業務委託が可能。

町（行政）の役割と推進体制

地域が抱えている 課題やニーズ等を把握し、生涯活躍のまちを構成する施策の立案、各種計画やデジ田交付金を始めとする財源確保、事業推進主体となる地域再生推進法人や各主体が最大限の力を発揮できるよう、プロジェクトの実行、伴走、全体・総合的な調整を担っている。

多様な人材・企業との連携

様々な知識やスキルをもつ転入者、地域おこし協力隊・地域活性化起業人などの多様な人材やオフィシャルパートナー（町と社会的価値の共創を目指す企業）などの企業と町・地域再生推進法人が連携して生涯活躍のまちを推進している。

多文化・多世代共生のまちづくり「東川版生涯活躍のまち」

「生涯活躍のまち」の効果

施策間連携・相乗効果

関係人口構築・移住定住促進に関する事業を中心として、各事業間で有機的な連携を深め、相乗効果を発揮させるよう取り組んでいる。

＜施策間連携＞
文化や芸術等の地域資源を活かした学びや活動を通じて、町民の誰もが文化的で生き生きとした暮らしを実現できるよう取り組んだ上で、その暮らし方を発信することにより、新たな人を町外から惹きつけることで移住定住プロモーションの強化を図っている。

＜相乗効果＞
都市部からの移住者や関係人口等の参加により、町にはない知識、スキル、価値観等を、地域資源を活かした活動に取り入れることが可能となった。結果、町民の活躍の幅が広がり、新しい働き方や仕事の創出につながっている。また、活動内容に普及に伴い、地域の外国人参加者が増加したことにより、日本の文化、日本語、ビジネスマナー等を学び、地域の担い手としての育成が図られている。

取組意義・メリット等

●「生涯活躍のまち」の推進により、町の魅力をさらに強化・発展させるとともに、希望する人が安心して子供を産み育てられる環境の構築、年を取っても健康で住み続けられる安心感の醸成、町内で自立して持続的に暮らし続けられる経済的安定の実現が図られ、東川町に暮らす町民の幸福度・満足度が高まり、その暮らしぶりをを都市部に発信することで、東川町への移住希望者・定住人口の増が図られた。

●異なる文化や世代の住民が互いに理解し尊重し合う、多文化・多世代共生のまちづくりにより、それぞれの交流や学びによって互いの力が引き出され、新しい働き方や仕事、活躍の機会が生まれた。

● 個別に実施していた事業を統合的・一体的に実施することで相乗効果が生まれるほか、国が地方創生の柱とする「生涯活躍のまち」を掲げることにより地方創生推進交付金等の国の財政支援を受けることができた。

北海道
東川町
－写真の町－
写真文化首都